

《巻頭言》

二十年の歳月にして

——『歴史と未来』第十三号発刊にあたって——

中 嶋 嶺 雄

自分に限ってそんなことはない、と思っていたのに、いつしか人生の年輪を重ねてみると、やはり先人のたどった道のりの意味がようやくわかってくる、ということがままあるものだ。

あれはたしか、大学院の修士課程を終ったときのコンパの席だったけれど、本誌第一〇号に特別寄稿「現代史研究五十年——歴史における『主体性』の問題をめぐって——」を寄せてくださった、私の指導教官・江口朴郎先生が、「自分の子供をもってみなければ、研究者として一人前になったことにはならない」とやや唐突に言われたことがあった。

当時、私は結婚はしていたものの、まだ子供がいなかったので、江口先生の言われたことがまったく理解できず、いや内心ではかなり反発して、やれやれ江口先生もなんてことを言われるようになったのか、などと思っただけの記憶がある。

だが、やがて四人の子供を育てるようになって、江口先生の言葉の意味がいやに重く沈黙してきて、やはり江口先生は大変重要なことを言われたのだ、つまり学問の道も生活者としてのリアリティを欠如したものであるかぎり、まだ本物ではない、ということを生訓として述べられたのだということが、ようやく理解できるようになった。

やがて博士課程に進学したのち、幸にして私はまもなく教職にありついたので、気がついてみると、もうあれから二十年の歳月を経たことになる。当年満五十歳の私は、本年三月末で外語大に奉職して二十年、現在は二十一年目も半ばを過ぎ、この十一月二十五日には永年勤続者としての表彰を受ける身になった。また、来る十二

月七日には私のゼミの卒業生諸君が内輪の祝宴を催してくれるという。

外語大の二十年間を顧みてみると、やはり大学紛争が、もっとも切実な体験であった。大衆団交で全共斗の学生諸君と対決した揚句、私の研究室がおそらく全国でも例を見ないほどに破壊されたこと、また三十歳そこそこの若気のいたりで教授会代表委員に選ばれ、外大は断固入試を実施する旨を学長（小川芳男先生）や学生部長（故石山正三先生）と一緒に文部大臣や次官と折衝したりしたこと、（東大と当時の東京教育大は入試が出来なかった）、さらには大学紛争という一種の極限状態で教授会内部の様々な人間模様を見てしまったことなど、語ればきりが無いけれど、それよりも何よりも、大学紛争は、私自身の思想上の遍歴にとつて、決定的に大きな転換点であったことを痛感する。

当時は、中国の文化大革命がまだ猖獗をきわめていた頃だっただけに、文革中国や「毛沢東思想」にたいする私の批判的視座は、大学紛争の体験によってますます固まっていた。

その頃、中国についての見方という点で、私の論敵でもあり、先輩の友人でもあった東大の菊地昌典氏が、ある対談のあと、喫茶店で話しながら、「僕もまもなく四十歳になるよ」としみじみ言われたのを聞いたとき、私は、まだ三十代半ばだったので、なぜ年齢がそんなに気になるのかしら、それにしても四十歳とはもういい年だな、など思ったことをつい先日のことのように想うのだが、その私もいまや四十歳どころか、五十歳になってしまった。

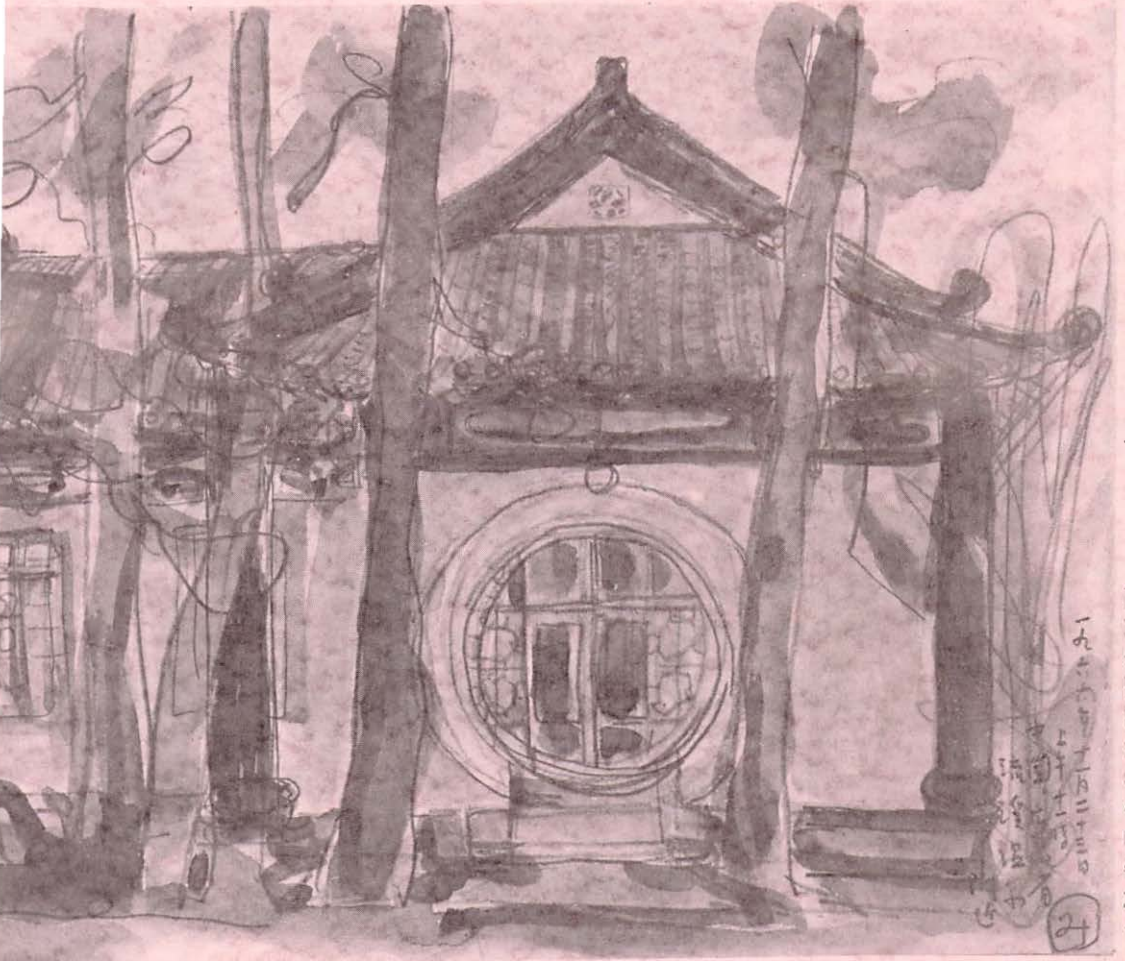
こうしてふりかえてみると、やはり人生ははやいものなのだが、二十年間教壇に立っていても、四十代の初め頃までは、講義を終えるのに精一杯で、学生諸君の顔を見詰める余裕も十分にはなかったような気がする。ここ数年は、ようやく講義もあまり怖くなくなったように思うのだが、それは一種の惰性なのか、馴れなのか、それとも弛緩なのか、とときどき考えてみる必要がある。だが、それはやはり年齢という問題ではなからうかそう考えてみると、いつの間にか、当の学生諸君が私の子供の年齢になってきているのだ。つまり、わが子に教えるように講義すればよいのだと思うようになったとき、ようやく私は講義の緊張から解き放たれたのであり、それには、やはり二十年の歳月が必要だったのであろう。

『歴史と未来』の巻頭言に、このような私的な回顧を書くことになったのも、同じく二十年という歳月のためなのかもしれない。

（一九八六年十一月二十二日）

歴史と未来

第13号 (1986年)



東京外国語大学 国際関係論
中嶋嶺雄ゼミナール

歴史と未来

第三号 (一九八六年十二月)

東京外国語大学 中嶋嶺雄ゼミナール
一九八六年十一月二十三日
十一月二十三日
中嶋嶺雄